

フリーライター

よしだ きよひこ
吉田 清彦さん

「男なのになぜ女性問題が」と、苦笑する。

にかかわるの」とよく尋ねられる。立場を理解してもらいにいく。「社会の枠組みにとらわれず、自由な生き方をしたいだけなんです

日本女性会議に向け、市民から公募された実行委員六十五人の一人として、準備を進めている。委員の九割は女性。男は少数派だが、「女性とメディア」分科会では部会長をつと

ひと探訪

メディアの中の女性問う

「らしさ」超え
自由な個性を

を押しつけられることに疑問を持ち始めた。

以前から、昔ながらの慣習や価値観に違和感を持っていた。「結婚」という制度に縛られたくなかったのもそのためだ。その思いを追求すると、女性問題に行き当たったという。

「男性が自由になるためには、まず女性に自由にな

める。

三十代前半で離婚を経験した。一人暮らしをして、家事は男にもできると実感した。逆に女が仕事に出ることにも当たり前と思えた。男らしさ。女らしさ。それ

一九八四年に「コミッション」の中の男女役割を問い直す会」を設立。テレビコミッションの改善を企業や広告会社に働き掛けた。活動の結果、「亭主の長生きは妻の務めです」「ぼくのためにみそ汁をつくってずっと」などといったキャッチコピーはブラウン管から消えていった。

今、暴力やセックスを描いた番組を受信不能にできる「Vチップ」の導入に関心を持つ。分科会では、視聴者の意識調査をもとに議論を深めるつもりだ。

「メディアに意見を言うだけではなく、番組の企画や制作にかかわれる仕組みをつくりたい。市民、とくに女性が情報の発信者になって、それぞれの問題意識をメディアに反映できる社会を目指したい」

五十三歳。神戸の 아파트が震災で倒壊し、九六年に避難先の大阪から尼崎へ転入した。喫茶調理専門学校の講師を務めた経験を生かし、「男性のための家事としての料理教室」の講師もしている。

記事・岡本 昌弘
写真・浜本隆一郎